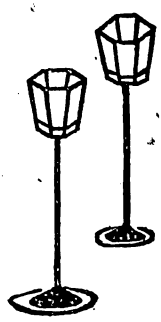
雜錄



豎曲類纂所載

近松と一中節

東京　伊原青々園

近松の兄が都一中なりとは萬象亭が「反古袋」に記せる珍說なり。此のこと眞事と信じがたし。されども近松の作が今日に於て義太夫節よりも寧ろ一中節に多く殘れるは大に意味の事なるべし。

近松が義太夫節の爲に作りし淨瑠璃はいと多し。而も其節の殘れるは誠に些し。殘りても「紙治」の如き「梅忠」の如き「夕霧」の如き大かた後の作者によりて修正せられ、「原作」とは違ひしものなり。手近の「宇治文庫」、「都羽二重」などによりて、一中節に殘れる近松の作を見るに、「お夏笠物狂ひ」「道行三度笠」、「丹波與作」、「業平河內通」、「天の網島」、「根引の門松」、「源氏烏帽子折」などあり。よし一中は近松の兄ならずとも、近松の作が彼の曲によりて盛んに傳へられたるは明白なる事實なり。此の點に於て近松を崇拜するの士が義太夫節熱心家にのみありて、一中節の末流に絕にてなきを余は不思議に感ず。

六代目染太夫自傳

六代目竹本染太夫といふは、五代目染太夫（後に越前大椽）の門弟にして、前名を實太夫といひ、今の竹本叶太夫の養祖父に當れり、五代目歿後其名蹟を繼ぎ、文久、元治の頃には、小堀口の大師匠（長門太夫）五代目春太夫等と共に比肩して、博勞町稻荷社內の操座にて常に三段目ものを語り、

斯界の巨匠を以て推されたり。資性篤實にして、何事にも用意周到、幼少より輙軻不遇、文字を學ぶひまとてあらざりしも、好んで文書に親しみ、絶にず淨瑠璃本を讀めるより、自らその化育を受けて、多少文章を解したるものと見ゐ、自ら筆を執つて己一代の來歴を草したるもの、終に積つて三十冊に及び、然もその筆致老實にして頗る理義に通じ、當時の風尙巷俗を窺ふに足るものあり。其趣味も亦多方面にして、或は時事を論じ、或は俗習を諷するの外、景勝の地に遊んでは、その山水を描寫し、僻遠の地に入つては、その風俗を紹介し、頗る世道人心を益せんと努めたるの痕も見ゆるなり。而してその書冊の間には、自筆の繪畫を加へ、高山植物の標本を貼付したる所もあり。後の淨瑠璃史を編む者に取りては、實に好個の資料たるべく、其所行宛然讀書人の如し。若し斯の人をして學界の人たらしめば、或は一個の好文士を得たらんも知れず。予過ぐる頃叶太夫より此の書冊を借覽して、坐ろに景慕の念を催し、同好者に對して推奬措く能はず。昨夏大阪大火に際し、彼の自傳中文政十二年江戸大火の記事ある一節を抄出して、朝日新聞紙上に掲げたりき、今や本會雜誌の刊行により、爾後續出して非文人に似氣なき殊勝の心掛を紹介せんとす。藝人にして文事の心掛ありしは、二代目團十郎、五代目團十郎、七代目團十郎、中村仲藏（秀鶴）等の外餘り多からず。特にかゝる大部の編著ありしは、秀鶴の「手前味噌」及び長門太夫の「淨瑠璃大系圖」の外には予の寡聞なる未だ曾て之を知らざるなり。

岡田翠雨

一、師匠染太夫に從ひて

實太夫江戸行の事

文政十年二月二十日、此時實太夫は（三十一歳）伯

父の方より喰通ふて師の家に日勤して居たりけるが、師の宅は越後町狸横町妙見裏なりしが、其時には古人となられし四代目の孫房事石屋染太夫三は後家茶屋をして、いづみや、おちへとて、あつぱれ泉孫の家相續して同所越後町、處は師の染三宅近所にて、同家同樣の因なり。爰に又師匠の内寶おつる(二歳)の男子松之助と云ふ子あり。すこしいりわけあつて、夫婦不緣となり、實子松之助には喰料を添へ離別の、おつるにあづけおき、獨身となつて、江戸下向と相成りける。扨て又師の江戸行の供を望者、我一と多かりしが、實太夫は師の心に叶ひしゆゑ此供實太夫ときまり居るは、實太夫大に此うへなく、直樣伯父を始め兄姉へ此事を語り、あるひは友達衆へも暇をのべ、程なく吉祥日にいたり、實太夫は師の馬のり荷物を預り、一日に三十石夜船にて城州伏見へ着す。

それより、實太夫は伏見の船宿小道具屋に泊り、

師匠の登り來らるゝを待ちしが、宿屋の我居間片脇の座敷より知らぬ若男何角賴度事ありとて出來る者あり。此節大阪芝居、尾上多見藏は、若かりし時から、町々の女中娘達おびたゞしくヒイキをして、諸芝居ま事ににぎわしき事なり、其中に三休橋筋久太郎町なる障子屋の娘は多見藏をヒイキより、いかなる事にや語ひあひて、其身をまかせしを、此事町中一ぱいにひようばんをして、立ても居ても、色がましい事を、只障子屋〳〵と云ひける。彼の障子屋娘の兄嘉吉と云ふ者、妹の事をうはさせられるのを、うたてく我家の店には障子の細工をも仕てゐられず、此頃自家出をして城州伏見迄來りて、江戸表にでも身をかくすべきなれ共路銀なければ、さまよひしに、爰にて染太夫江戸行ときいて、染太夫にすがり添て、江戸へ賴み行たき心にて、此座敷へ出來りしなり。扨て嘉吉は、實太夫に右のゑだらくをかたり、江戸表へ

供をいたさせくれ度事段々のたのみに、實太夫はめいわくながらともあれ、今に師匠も當地へ來られん、其上の事といふうち、やゝしばし程すぎて染太夫は大阪用事調へ出立して、宰領江戸駕籠屋金助に案内させて、當宿に着しける。師弟面段の上、實太夫は彼の嘉吉が頼みの入わけを語りしが、染太夫はきゝ嘉吉をあはれみ、爰よりして嘉吉を我供同やう四人連にて、伏見を出立して、道中筋へとあゆみ行。かくて染太夫此嘉吉をいとしんせつにして、道中諸事をまかのふて遣はし、後に江戸着の上知るべをもとめ、其地成る障子細工の家へ手間取り奉公に遣はせしが、二ヶ年ばかり勤しかば、大阪には障子屋〳〵といふ取りざたもうさる時分をさつし、今迄勤居たりし親方へ程よくして立別、染太夫に一禮をのべ暇を乞て、大阪へ立返れり。其後師弟其嘉吉に大阪にて合見せず。扨て道中これ迄太夫役者は、雲助に金錢をねだられ取らるゝ事まゝあるによりて、師匠は此の事をふかく案じ、此の事江戸芝居の衆へ咄せしに、江戸金方は鹽瀬新次郎とて紀州御用の家なれば、此人より道中の所帶刀をゆるされ、紀州御用にて通路致されける。されば供に附添ふ家來といふは弟子實太夫なれば、道中のよび名を喜平とよびなしけれども、風俗はとんとそぐはぬなりがつこふにて、一寸見たる時は飛脚の出來そこないの如くなり。師匠をよぶ言に、旦那〳〵ともいひ、又は親方〳〵とも云しが、いつの程にやら、打わすれ、御師匠さんと云て、去くじりたり。にわかに家來（嘉吉。。。。。。と云ふ）が一人できたれば、此風俗は又格別にて、そぐはぬ取なりなり。

只一文なしに飛出せし事なれば、旅裝束もそこそこ、まるの堅人の職人にて、年もいまだいとけなく、この時嘉吉が、腰にさいたるは銀子三匁五分計の小供ざしの朱ざやの脇ざしなり。ま事に不都

合なる風俗なり。去かし何分に御帳面が紀州御用にそういなく、物になれたる江戸の金助が宰領なれば、ぶなんにて、道中はすれども、此節春の時分にて大名の御通行をげゝれば、こちらも武士の出立にて何角とうつとしく思ひ、こわ〳〵ながら、御大名の行列に扳つかくれつ、あゆみしが、なさけなき事は、毎夜泊り〳〵には、よろしき宿を御大名にとられ、宿屋よりさし宿へつきやられ、とんとよろしからぬ宿やに泊りし事、うたてけれ。さても雲助のうれひはのがれても、武士すがたのひとくらうして、よう〳〵三月二日江戸本石町四丁目伊勢屋宇右衛門と云ふ泊り宿に着しける。

二、師匠染太夫江戸旅宿伊勢半逗留の事

文政十丁亥三月二日師弟ぶなんに東都に着し、芝居仕打のさしづにて、伊勢屋宇右衛門と云ふ泊り宿屋へおちつき、當分は此泊り家よりして、芝居へ出勤する。扨て又芝居は當春正月興行のつもりなりしが、去冬二丁町の出火に此芝居類燒におよび、普請延引してよう〳〵三月興行となる。則芝居吹屋町肥前座にて、座頭竹本津賀太夫、小田館の通の成、師匠染太夫は附物關取二代鑑を勤られ、ことのほかひようばんよく、弟子實太夫此度當所へくだり立の事なれば、役場わたらず。其身の役なかりける。扨て師匠は芝居役場を毎日つとめ、せひとも目見えをせねばならぬむき〳〵あり。又は都めづらしければ、ヒイキの旦那たちによばれ、名所〳〵遊所遊參遊船幷に芝居かはり、げだいあるいは、戀無常、師の事我事をかきませて、是に寫せと、此書前後廐長のころより、實太夫後年改名し、二たびして、出世におよぶまで、凡百七八十年の記錄ゆゑ、くだ〳〵しき事は取りのけて、あらましを書つたふるのみ。されば芝居場が

ずも出そろひ、師匠ぶたいにもなれ、殊の外ひようばんよく、心おちつき、目見えに行方は、第一此度の金方にて、鹽瀬新次郎樣、幷に小池孫市樣幷に芝居近所茶屋れん中そこ爰へあいさつに行たるが、中にも鹽瀬樣にては、過分の金子衣服をいたゞき、猶大幟ふたさを下さるやくそくをして返りしが、さつそく兩三日に彼の幟芝居の表にたちて、大いににぎはいとあひなる。それより又、小網町釜屋傳兵衛樣といふ人、芝居を見物せられしより、御ヒイキになり、隣町峯龍亭へ師弟連られて、酒ねんの所へ、角力の高砂、龍川、兩關を相よせられ、當人共近付になり、または日をおきて、右の釜傳樣連にて、淺草參り、あるひは後に兩國花火見物、幷に同所青柳亭行、向島行、江戸一のうなぎ屋行、上野行、二十六日夜船にて行、猶後にいたりて、大雪に向島よりして、深川遊女町百風呂にあそびねつゞけ、龜井戸天神樣へかけ廻り、後に兩國筋萬と云ふ料理家に、四日の夜酒ねんを催し、只いつこふに寐る事あたはず。大丈夫の師匠に附添まはる弟子實太夫も、大根者と近付人是をいふ。

又日をおきて石町新道紅鱗亭行、兩國、深川辨天遊所、内神田唐人料理王子參り、坪の内參りにいたるまで、わづかの月日におちもなく、師匠染太夫も弟子もはや江戸子一粒より、芝居は先達て二代鑑大入をして、日數五十四日うちつゞき、それよりをはる藝だいは、又も附物吃の又平、幷に忠臣藏にては九冊目に寺岡平衛門双蝶々引窓、秋の頃にいたりて、日蓮記染師の勘作住家、こをのほか大當り、年も明れば初春に、薄雪の中のまき、出世太功記、後が、壁には九十九館に、玉椿妹脊山、向床が、(彌太郎事)若太夫、本床師匠、加役に萬歳酒呑童子、綱の館、是までの所、長らく相つとめ、肥前座をいとまを取つて、文政十二年、

巳丑年の二の替り堺町の土佐座芝居へ出勤となり、初げだいは、伊賀越沼津、替り藝だい梅川飛脚屋、それよりして、糀町平川天神社内芝居に於て妹脊山大判事、切に二代鑑、是より芝神明社内芝居にて、二十四孝三だん目、替り藝だい忠臣藏九冊目それから品川高輪如來寺芝居へかはり、千本櫻、此時弟子實太夫追々はつたつして、序切に三段目の中、きみ實太夫が役場なり。

それよりしだいに年もへて、天保三壬辰二のかはりは又堺町土佐座戻り、藝だいは八陣の段八冊目本城の段、實太夫役は序切に八冊目の中、かはりて二十四孝の段三段目、實太夫役は化物屋しき、それより木挽町芝居へうつり、伊達くらべ、實太夫の段はにふ村の中、師染太夫は附物吃の又平是より奥を書ならべては限りあらねば略せり。それより當地寄場座しき淨るりにさしかゝる。先づ始りに芝神明前金板席、それより糀町萬長其外年々出勤に廻りし家數は、あきらかに覺えあれども、是こそま事にくと〳〵しきゆゑ、是を略して戀と無常に取かゝるは、師匠はこれまで石町の泊り家に旅宿してゐられたる所、御ヒイキ伊勢屋忠右衛門様と云ふ大家ありしが、大旦那此隱居所にゐられしに、今はまた、木場の別荘にうつられ、此隱居所には、留守居もをらず、家は〆切ありて師染太夫大ひにヒイキになり、此家（田所町伊勢忠の家）を預り引うつりたるが、中々大きなる家にして、間數も有り、坪の内ひろく、草木しげりいゝこふと云ふ家は是なり。扨てこまるのは、弟子實太夫なり。大きなる家に、朝夕あけたてする雨戸の數二十四枚あり。是にならひてことの外に多用の中に、此家より師弟芝居出勤する事ゆゑ、日毎のはきそうじもをこたらず、飯たきが始めにて、毎夜酒宴のこしらへ、三助がはりの使ばんはもとより、師染太夫の芝居へ住込るゝ咄し、談事

合、あるひは衣服の、ぬひ仕事、仕立屋への取渡し、ふんどしのせんたくやら、ある時には御座敷にだされて、出行れる時、荷物の造らへよりして其供に連られたるが、あまり多用の中無人ゆへ、何人にても居候者がほしゝと思ふ處へ、折々大阪より師の弟子やら、又はこんせつの下廻りの太夫師を尋ね來りて居候者をする者、居合す事あれども、しんぼうを仕かねて、立去る。實太夫は今は多用たりとも、苦勞にならず、心勇て心一ぱい身をはたらかせ、夜々酒宴を仕舞て、師匠もね入らるれば、それより我手帳日記を書しるしたり。師のそばを放れず出るにも入るにも、附添居れば あたり近所の人々、此師弟が、門をあゆむを見る度々ソレ〳〵辨慶々々共云、又は片假名のトの字共と云をりたり。其のわけは、師は着丈四尺二三寸、弟子は着丈三尺四五寸にて、雪隱へ行かるゝ迄、はなれぬゆゑ、トとかくの如く諸人是を云ひをりたるなり。それはさておき、御座しきの先々略して、軒數斗をいふ時は、まづ始りが、神田荒木金次郎樣當旦那は御綿御用人にて師染太夫をまねいて、常々淨瑠璃のけいこをいたされ、金閣寺幷に太平記玉椿など語られ、師を大ひに御ヒイキ下されて、折々大金を、めぐみにあづかる也。扨てそれよりは、鐵砲洲濱中樣ざしき、新吉原玉屋同所扇屋平泉屋、田所町西村松前樣御殿京橋本村木挽町天滿屋八丁堀島旦那、水戸御前、一ツ橋御前、品川、若松、四谷組屋數小谷作内樣各〻御座しき、一度にあらず。なほ又、遊所の方々に別して毎年冬にいたりて戎講度々によばれゆく事なり鹽瀨樣なぞは度々の其のうちも神田明神樣御祭禮につき、御座しきありし時、上廻りの太夫、三味引殘らず打寄られ銘々藝共は、本式はならず、銘〻一藝しやれた事ばかりにて、酒宴が、第一なり此時當地に西村幸助と云ふ淨瑠璃の素人太夫あり

しが、日高川を語りけるが、三味線は一丁にてはこたへぬと申ゆゑ三味引語助、市太良、勝造、吉右衛門、勝助、右五人一時かたまりて、西村幸助に日高川をかたらせ、三味を引たて、三味を引をはりに五人の三味線五丁一時に、ばちにて三味線のかわをやぶつて、五人の三味引が云ふやう、西村幸助さんの聲には叶はぬとて、あきれた顔をすれば西幸さんは、いよ〳〵頭に乘りて、此時より猶金太郎高うなりしときく、爰にまた、師染太夫上方にても御ヒイキの旦那たちあれこれ有りし其中に、大阪近郡灘の作酒屋の松倉樣と云人あり。此旦那先々四代目石屋橋染太夫をも御ヒイキにて折々つゞきて當五代目染太夫まであつく御ヒイキをいたされし御人なり。

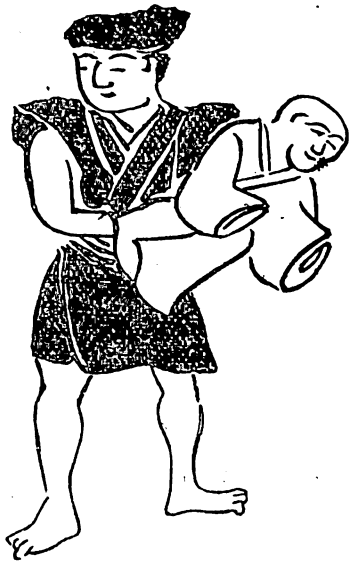
されば此度當あづまの新川酒問屋に仕切寄にお下りになり、旅宿は右の新川の播磨屋と云ふ酒問屋にて、染太夫に面談いたされしこと度々にて師染太夫の芝居を見物に入られ、吹屋町中菊と云茶屋へ染太夫幷に野澤語助もろともにおまぬきにあづかり、大いにちそうになりたるが、此旦那淨瑠璃はよくかたられ、師染太夫の三味線にて語られたり。此座しきの先々をあらましいへば、先始りのざしき、新川千代倉幷にかやば町新堀中尾屋にて竹本志賀太夫のさらへ會、右何れも語り物吃の又平なり、此時當地芝居出勤の(富太夫事)吉野太夫後に住太夫と改名をせし太夫、此度び大阪へ歸るに付、御當地名殘りの會白銀町井關にてもよほしあるにつけ、かはり吃の又平を語りに行く。それよりかやば町鴻池太郎鳴戸太夫のさらへ會にては長柄をやはり染太夫の三味線にて語る。此間大分の日數なりければ、早出立とありて、樂家、新屋熊野屋にて出立ふれまいをいたされ、明る日は彌々出立なりければ、師匠は旦那を見立、品川高輪の料理屋にて酒宴して別れける。此時師弟共過分

の禮物を納受して立歸る。扨てまた、前文にあらはれし大阪出立の時、師の染太夫が實子を離別したるおつるに預け置きてより別れし實子松之助の事ばかりを案じくらせるが、此子病氣をせしとの報知の書面到來せしかば、師匠は、これを見るより大いにちからをおとされ、人眼に見せぬ落涙はそばに見る眼もいとほしく、扨てそれはおいて爰に又本町のほとり何やらといふ女あり媚かたちは美しくいと艶き女なりしが、ふと有とき師匠に心をかけしにや、酒をも呑かといへるが、師匠は其後此女の身上世人に聞きければ、此女は師匠が當時預り居る住居をする座敷の本主伊勢屋忠右衛門様のかこひ女ときゝしより、さすがの師匠もおどろきて、今さらこうかい先きに立ずとて、其身をたしなみ居たりける。まことに惡事千里とて、いつの程にか旦那の耳に入りしにや、或る日、伊勢屋より至急に人をもつて、他の事はいはずして、家明けを申渡されて、師匠は只口あんぐりとして何分伊勢屋より他の事をいはねば、利口らしき返答もならず、いさいかしこまりしと答へして、直様家の取り方附を、實太夫に打まかせ、其身は爰を退ぞかれ、後の始末は實太夫心配すれ共、旅の空餘分の荷物もあらざれば、一時の間、住なれし彼の家を明渡し、一兩日はさまよひしが、此間名殘りの會をもよほしたる吉野太夫上方へのぼる用事もすみて、上阪のこしらへ共今迄の住居とせし賣家を買ふ人とぼしくして、出立延引の時と聞くや、これ幸ひと早速に談合きまりたれば、取引も相濟み、直ちに家のそうじもして、文政十年亥八月二十五日本石町四丁目新道の家に引うつりたり。

（未完）

なれぬか、いろ〳〵の邪魔がはいりて、その夜さは泣いて別れた、その翌る日が十二日、お前へ渡す江戸の銀が着いたのを、夢のやうに懷にねぢこんで、新町まで一散にかけつけたが、何處をどうして飛んで往たやら、一切おれは覺ねぬくらゐ、だん〳〵と青樓の主人を賴みこみ、身請の相談やめさして、どうやらかうやらこつちの方へ根引することに、相談を極めたのじや。忠兵衛耻を忍びて、心の秘密を打明せり。いかに沒義道なる八右衛門といへども、一片の同情なくて協はぬこゝ〻なつた。あ〻色男金と力はなかりけり。血氣壯なる時は、戒むること色にあり。實に金言。

（未完）



傳記

聲曲類纂所載

六代目染太夫自傳（續）

岡田翠雨樣より、染太夫自傳一旦貴下へ返却致し置度他に話しも有之ば一兩日中に鳥渡來い、との葉書を頂きましたので、直に糸屋町のお宅へお伺をしました。岡田樣のおつしやるには四五日中に天王寺の方へ家を引越す事に成、又避暑旁國へ歸つて一ケ月程遊んでくる積りゆゑ借つて置いた染太夫自傳、一先持返つて置いて下され、そして又一冊づゝ、近松會の編者に渡

してくれ給へ、しかし、君の本だから、どふです、君が原稿紙に寫して、會の方へ出して下されば好都合じやがとのお咄し、めつそふな、私共は淨瑠璃本の他に文字を書いた事はなし、迚も出來ませんと申ましたら、何君、淨瑠璃語りだつて現在此本が出來て居るではないか（自傳本をしめして）分ればよい字體はどふでもよいとおつしやるので、それでは一番先生の小生顔して寫して見ませう、と斯考へました、もし級第したら、原稿紙を芝居の樂家に備へて置いて、扨面白い咄しの出た時毎に、各々書く事に仕ましたら、それこそ又一種特別の珍妙々たる雜話あつめが、或は此雜誌に載せて頂き、面白い事に成かも知れませぬと存じ、先試みに第二卷だけ、染太夫自傳原文の儘を私が、原稿紙に寫す事に致しました。

竹本叶太夫

三、師匠妻を迎ふる事

東都は、女人器用發明にて、女の音曲は、江戸に限ると云へり。師匠は、田所町伊勢忠の隱居所に在し時より、諸方の娘たちに義太夫を敎へ來りしが、石町新道に移りし以來、益〻稽古の娘連盛んに來ることゝなれるに、中に仲喜といふ女弟子あり。年は二十二三にして、殊の外藝道の覺ゑよく物數少き人柄なり。爰にまた、日毎に稽古に來る荒木金治郎さま、藝名旦齋と云ふ旦那ありて、自身媒酌人となりて、右の仲喜を師匠の妻に世話せらる。

めでたく茲に婚禮も隅田川、仲喜の呼名を取かへて、お稻と改められしは、田穗屋に因緣ありと知られたり。

則ち當人の双親は、隣町堀留二丁目錫屋茂兵衛とよび、夫婦一家のちなみを結ばれ、行末長き榮ゑ

とは知られけり。

四、師匠の子源治郎誕生の事、

附り江戸大火にて師匠宅類燒赤阪へ引越の事

師匠染太夫、女房お稻殿といと仲睦まじく、月を歷て、お稻懷胎して、男子をまうけ、荒木旦那の名附けにて、その子を源治郎と申す。祖父祖母のよろこび大方ならず。夫婦慈しみ育てける。

此頃師匠は、堺町の芝居へ勸められて、梅川忠兵衛の新町の段を語り居られ、前淨瑠璃はひらかな大序より三段目までなり。則三段目は當地の津賀太夫、二段目切が下り佐賀太夫事中太夫なり。此太夫は、先岡島屋中太夫の直弟子にして、大阪にては政子太夫と云へり。扨又二段目の中、先陣問答の所、太夫三人の掛合にて有しが、芝居閑になりて、掛合の所、代り役に相成り、梶原源太の役中太夫、此の代役美咲太夫、腰元千鳥むら太夫、後に綱太夫と改む此の代役菅太夫、梶原平治は師匠染太夫、此の代役實太夫なり。時は文政十二己三月二十一日ひらかな盛衰記掛合の最中なれば、朝四ッ時なり。實太夫は平治を語り居る所へ、出火知らせの半鐘の音ジャン〳〵と冴ねて聞ゆれど、見物も騷がねば、床へ知らせもなく、心に掛れども、役目大切と語り居る折しも、次第に火事大きくなりしかば、見物も立かゝる、拍子木打ならして芝居は打出しと成るが否や、實太夫は床より飛下り、火元の樣子を尋ぬれば、外神田なりといふ此所より道程二十丁もある事なれば、芝居には氣遣ひなれど、火元より師匠宅へは十四五丁あり、是もさのみ心配する程の事ならねども、只無人なればすこしも早く歸りたしと、部屋の仕舞もそこ〳〵にして、只一散に驅出し、空を見れば墨色の惡雲なり。風は北風にて、師匠宅は風下なれば、南無三一大事と、氣は矢竹、汗水流して師の宅へ走りつく。

實太夫曰く、當地は世人の知る火早き所なればこしらへ、今の住宅の表八疊の間の天井は、只見れば丸竹の天井と見ゆれど、火事の時は荷物を片づける時の用意にして、すはと云へば、片方の綱を手早く引けば、天井ばた〳〵と下へ落ちて、丸竹は一本々々に別れて、荷物の荷ひ竹となり、又其中に荷物をくゝる細引、及びいろは付にしたる名所書、帳面まで出るしかけなり是を以て出火の要害堅固となす、常に見る人、不思議に思ひ、之は何の爲かと聞くにぞ、その譯を答ふるに、是は奇妙なり、上方者は用心ぶかいと笑ふ人もあり、感心する人もあり。

扨、この時は、常に苦い顏の師匠も、この要害に片頰に笑をふくみて、實太夫の戻らぬ間に綱を引いて天井を落し、落くる細引おつとりて、自ら手頃の荷物をこしらへ居らるゝ所なりしかば、實太夫は直に手傳ひ荷造に忙しきをりから、强き北風に飛火して、早くも近所へ燃付ければ、內寶お稻さまは一子源治郎をいだき、堀留の親里へ逃げ行かる。其中に見舞に來りし人々へ、荷物をそれ〴〵に渡せども、急火の事ゆゑ、たくみに造置しいろは附の札印も、帳面も役に立たねど、天井の丸竹は大いに間に合しなり。

先荷物は大方に取り除けたりと思ふ折しも、早四五軒隣へ火は廻り、手傳ふ人々唯の一人も殘らず遁歸りければ、後に實太夫一人力身立、これより二階に殘りし小間物、疊まで助けたしと思ひ、御役人衆に叱られまはり、二階の格子叩き破り、疊は元より、あたる物を幸ひ、大道へはうり出し、それより我身も大道へ飛んで出、一間手車に荷を積のせ、それより澤庵桶樽二三挺を出し、簀子下の常下駄まで、火中に分入りて取出し、心殘りなく此場をにげのき、取出したる荷物は、本町の河岸端に集め置、番人を賴みて、師匠夫婦の在所を尋ね行くに、堀留のお稻さま親里も燒うせ、更に

人々の行方知れず、何はしかれ、明店を見付けて住所を極めんと思ひ、家をさがせども大火なれば明店あらばこそ、其の上に火は今も眞最中にて、逃場へ火が廻り來れば、本町の川岸にも荷物はおかれず、呉服橋御門の内は大丈夫と、我一に持込むゆゑ、又も手傳ふ人をたのみ、此所へ荷物を置直すうちに、早日も暮て今宵は爰にて夜通しに戸障子を家根として寢んと思へども、まだ如月の半にていとゃさむさはまさりける。

さても、此出火大火となりて、抑〻神田の燒出より、南は品川の邊まで、東は兩國内と外、西は御城の堀際まで、凡南北三里餘、東西一里の燒亡にて、古今まれの大火と云ふ。すでに其夜も明ぬれど、火は今尚鎮まらず、燒跡のみは靜なれば、諸方の善人お粥の施行、米錢の施待あり。

御公儀よりは、御救小家、諸々の御見附〳〵に建られたり。扨質太夫三四日は、此の丸の内に諸方より施行を請けて居たれども、いつ迄も荷物を片附る所なければ、如何はせんと思ふ所に、此の時深川に師匠の女弟子おかねと云ふあり。此家に師匠夫婦、世話になりて居らるゝよしを聞き、大に安心をいたせり、尚又、その隣家に明店ありて、おかねの親喜八が引合にて當分此の方へ來れとあつき世話になり、小船をかりて荷物を積み、さう〳〵深川の小船入と云ふ所へ立越に、一同喜八の世話になりしが、何分淋しき所にて、手の平ほどの家なれば、ぎやうさんなる荷物を解ほどきすることならねば、大に不自由をして、只々世の中の玄づまるをのみ待合して、三四十日は暮せしも、芝居寄場も大方燒失せて、漸く殘れるものは此邊なれども、末町の小まかき所とて、寄場はあれども淨瑠璃をかけて詮なき事ゆゑ、働くこともならず、まだしも山の手ならば大場所なれば、寄をかけても引合になるゆゑ、ともあれ談合せんと、直樣立越し相談せしに、寄場の亭主大に悅び、談合極りしが、先方にも心配をして、申さるゝには、

深川から三里も在る所を、毎日通ふこと能はざれば、山の手にて店を求めさせたしとて、此人の世話にて、赤阪御門外の明店を借りうけ、急に深川のおかぬ兩親に一部始終を話し、それより小船にて荷物を運び、同年巳四月十八日山の手赤阪一丁目寄合町の家へ引移りけり。

かくて、追々家に居なれて、一ツ木の寄場に淨瑠璃を始めしに、何が大火のあげく、事珍しとて、殊の外大入繁昌をなし、世間も次第に人氣靜まりて、我々の商賣景氣づくこそうれしけれ。

五、竹本實太夫常吉と喧嘩の事

東都は大繁華の土地なれど、とかく火事の騷ぎ常住にて、土地になじまぬ他國者は、風が吹けば又出火か、若しや燒ては來ぬかと、寒さの時分は夜も碌々寢られず、半鐘の音ばかり氣にするぞかし今夜は五ケ所、昨夜は六七ケ所と、出火の數を聞く度に肝を冷し、胸轟かすは田舍者の常なり。されど土地に生れし江戸ッ子は、東西わからぬ折より半鐘の音を添乳にする程なれば、出火なき夜は却つて淋しくて寢られぬなど云へり。

師匠染太夫は此の山の手に住馴れて、頃は菊月の始つかた、空も長閑なれば內實お稻一子源治郎に供人連れて親里へ保養がてらの見舞行き、泊りがけにて出られけり。扨て留守の居候は實太夫、始め三人あり。一人は供をして出たれば、あとには實太夫と、高の常吉と云ふ者となり。此の邊の遊所町といへば先赤阪の梅貴女子、三田の△、四ツ谷新宿などいふ女郎場所ありて、師匠を贔負の旦那衆は折々遊所へあそびに行かるゝにぞ、實太夫もお供をして通ひし事は度々なれば、いつしか名染重り、旦那衆よりも熱うなり、ツイ己惚の通ひ路も、四ツ手駕籠のほふり込み、師匠の眼を盜みての遊び事、始は半時、一時が、ついお泊りの朝戻り、師匠は知らじと思ふが馬鹿、例の居候高常

め、女郎買より⚅の廻り、長半ちよぼ一、骨牌事、何處へはいるか、戻りには襦袢ばかりになりがたち、人は好けれど去みたれた裸暮しもうたてけれ。

此頃師匠は、酒宴の門數多く、先から先へと呑くらし、今宵も亦留守なりと、鍵を預かる身は尙さらに大事〳〵と實太夫、師匠への仕へは堅けれど心の外の放埒は後にぞ思ひ知りたりける。

或日の事、師匠夫婦留守の折から、實太夫は例のちよんの間して立歸り、別に何事もなかりしに、師匠も此頃花々しくはいる所の在と見ね、何所から共云はずして、これ〳〵の着換持來れと使の者をよこされしかば、鍵を預かる實太夫、簞笥の引出開けんとすれば、錠前は切れて、鍵は役に立たず、こは不思議と思ひながら引出せば、中はもぬけの殼ばかり、アッとびつくり仰天し、四方を見れは高常も居らず扨は彼奴めが合鍵をして、中の衣類を持出したるに極つたり。たしかに博奕場に居るに相違なしと、氣も狂亂に、兼て知つたる行先へ、一目散にかけつけ、當人を引捕まへ、恨の數々取まぜて詮議すれど、高常は早文なしに成果て、氣抜の如く他愛もなければ、摑みつきても、打伏ても、所詮間に合ふ事なしと心に觀念し、實太夫が着たる縞縮緬の着物上下、緋縮緬の襦袢、上田辨慶縞の羽織より、銀金物の煙草入まで擲り出し、素裸になりて高常へ賴むやう、只今かく〳〵の次第なり、その品々渡さずば我等一分相立たず今が生死の境ぞや、汝が持出したる衣類、何卒戻してたべ、とく〳〵此の品々と取換くれよと、ひたすら賴めば、高常は氣の毒さうな顏附して打うなづき、實太夫を待たせて、急ぎ馳出でけり。やゝ時うつるまで待てど高常戻り來ず、よもやと思へど、心ならねばかけ出さんにも丸裸、行先とても知れざれば、胸は早鐘氣も狂亂、早日も暮かゝれ

ば、師匠の衣類持歸りたりとも間に合はねば、返す返すも高常に出し拔かれたることの悔しさよ。師匠への言わけも立がたしと、髪も逆立、身内ふるひ、やゝ默然として、こぶしを握り、果は男泣にぞ泣たりける。

やゝあつて、思案を定め、いつまで爰に待たりとて、甲斐あるまじ、一先爰を立去りて、彼奴引捕へ、取戻さんと、漸に氣を落付、ともあれ此の風體にては往來ならず、されど幸に日も暮たれば、人顏わかぬを仕合と、心安き古手屋へ行き、持合す金にて、古着買求め、あほらしくも立歸らんとしたれど、どう云面さげて師匠の宅へ歸らるゝやと、唯ぶら〳〵と夢心地、今宵は寢るに家もなく馴染の遊所屋に一夜をあかし、夜の明るを待かねて、今日こそ惡くき高常を搜し出さんと心を定め無手ではもしや仕損せんと、江戸の町をかけ廻り六七寸の小合口を買もとめて懷中し、出行先は博奕場と、人も知つたる屋舗の部屋、日暮を待つて入込む博徒等、折もよく高常に出合ひたり。我身の切なき物語りし、どうか仕樣のなきことか、衣類を返して、戻してと佛を拜む如くにて、泣いつ口說いつ歎けば、彼は入墨の體をどつかと坐し、持前の地金を出し、再度師匠の家へ歸らぬ心か、人もなげなる野太き惡口、短氣の實太夫、もはや溜りかね、爰ぞ生死の境なりと、隱し持つたる懷中の合口閃かし高常が眉間目がけて只一討と切付しが、漸う淺疵一ケ所負せしのみ、血は邊りにほとばしるを、今一討とする處を、相手も痴者實太夫が腕首しつかと引つかみ刄物奪らんとひしめけども、此方は一生懸命、持たる相口離さばこそ、必死と爭ふ折から、屋舗の事なれば侍衆大勢來りて、此の樣を見るや否や、有無を云せず實太夫を取て押へ、刄物ばいとり高手小手に縛りつけ、あたりの小間へ押込たり。

（未完）

傳記

六代目染太夫自傳（三）

竹本叶太夫

六、實太夫勘當をうくる事

實太夫は默然として、縛られながら、心には高常めが淺疵なるは殘念なり、討もらしたりとて、此身の罪科はのがれがたし、それは元より覺悟を極めし此身なれど、唯案じられるは師匠の事、さぞやこのこと知りたまはゞ、惡くしと我をさげすまれん。ともあれ、弟子の仕出し事、師匠にかゝりてもつたいなや、御難儀をさつしやらうと、是のみ案じるばかりなり。斯て其夜も更ぬれば、早明方の頃に成り、役人なりと名乘り入りくる武士ありて、實太夫に云きかす事、喧嘩のしだい、ちく一わかり、ともあれ其方はかゝる御屋舗をさわがせし咎一方ならず、直樣牢者におよぶ所成れ共、知音の者の願ひにより、彼の者に預け、他參を留る、やがて裁斷あるべしと、知音の者に引渡し、役人は去にけり。されば此知音とは、たれならんと顏を見れば、美野屋權八とて、赤坂の顏役なり。此人と云ふは駕籠屋商賣にて、師匠の家も出入のものゆゑかく迄骨を折れたり。扨それより二人連にて屋舗を出、道すがらの咄しには、扨も大變出來たり、悔んでかへらぬ事ながら、斯いふ事なら此事を我等に斯と咄しせば、大變にせまい物、染先生も此事きいて大いに心ばいやら、立腹やら、何分我にたのむとある、然るに、今御屋舗にて當人を預りしが、我等が家は氣づまりゆゑ、よき居所をこしらへ置たれば、諸事我等にまかされよと咄しの内に、早赤坂へ歸りきて、我等が預け置家

は爰なり、と連立はいる。此家は師匠の女弟子にて、小初といふ者の家なり。實太夫とは傍輩同士の事ゆゑ、權八が計ひにて押て、此家に頼み込み預けられしなり。小初は當時二十才を越し、一人の母親を養ひ、其身は義太夫の稽古屋をして、又寄席へも行き、ほそ〳〵世の營みを立居るものなり。斯て、みのや權八は小初母親兩人に此體たらくを語り、ひたすら頼みければ、小初親子も仔細を聞、實太夫は兄弟子の事なり、師匠のおもはく且は權八の頼みゆゑ、早速承引なし、其日より實太夫を厚く世話しける。

扨實太夫は、小初親子の情けにて、日をおくり、明暮師匠の機嫌いかゞぞと陰ながら窺ふ所、ほのかに聞けば、師匠染太夫は實太夫の一條に付、益〻憤り強く、此度高常の持逃げも彼れ計の仕業にあらじ、實太夫の遊所通ひ、中々ちいさき事ならず、衣類の鍵を預かるを幸ひ、己も自儘に致しつらん、畢竟此度高常が不埒より顯れたる事成りと、只一途に實太夫を疑ひ居られるとの事、聞て今更心ならず心配なし居たり。

扨又爰に、權八は彼の御屋敷へ、屋敷を騷がせし事の詫願ひに幾度となく出たれども、役人衆は聞入られず、權八も十方に暮れしが、つく〴〵思へば、此喧嘩は元來部家にての事なれば、部家の者へ賄賂をするならば、濟さるゝ事もやと心付、或日過分の黄金と、實太夫の誤り一札諸共懷中してお屋敷へ罷出、部家の人達に夫々に扱ひ金をなし又高野常吉にも疵養生の料として金を遣はしければ、權八思ふ途をはづさず、終に御屋敷表は何事なう相濟み、又高常の身の上は權八が後の所存と思ふ内、本人いつの間にやら逐電して有所も知ずなりにける。（此一條は餘程込入たる大變なれば、喧嘩の始めより是まで日數五十日が間の事なり）既に日數も行暮れて、染太夫の心も少しは柔らぎ

しと聞、或日の事に寶太夫は權八に伴はれ久々にて師匠の方へ出行ければ、師匠は寶太夫に向ひ、不行跡の段々一々語り聞されつひに、今日より永々勘當申付るとのことなり。寶太夫も豫て覺悟はなしけるゆゑ、此期に及びて、お詫び申も返つて不孝、時を待て御聞屆けたまはるべし、必ず御見捨下されまじくと立上り、家内の人々に挨拶をして又小初の方のそれ〳〵の挨拶も權八に賴み置き師匠の側を離れ、出行く憂思ひ、今歸りてはいつか又師にまみゆる事あらむと、思へばいつそ打しほれ、泣々出る後髪引るゝ心取直し、すご〳〵家をぞ出てゆく。

（未完）

◉さて少し後先になりましたが、竹本染太夫自傳に附て聊か見聞致居ます事を申上げます。先一寸時代の荒ましを申ますと、元祖義太夫氏は正德四年に沒し、近松氏は享保九年、丁と義太夫よりは近松氏の方が十年跡で沒し、夫から初代元祖竹本染太夫は天明五年に沒す、近松より又六十年も跡ですが、もし六十才まで生て居たと致ますと、近松沒すと跡先に生れ來た譯です。本名は田穗屋源七と云、三根太夫より染太夫と改名、二代目は梶太夫より染太夫と改名し、文化三年に沒す、三代目は三根太夫より染太夫に改名し、文化五年に沒す。四代目は重太夫より染太夫に改名し、文政六年に沒しましたのです。此四代目染太夫（石屋橋）と云人の時代則寛政より文政の頃までは、淨瑠璃の書本も當今の如き太肉ではなく、ほんのお家流其儘の書流しにて、章の如きも元祖義太夫より聊も違ひをらず、皆々立流に章を入られたとの事です私共も至つて古本を好みまするので、他より買ひ集め、又は以前持合せて居ます、四代目石屋橋さんの本、及び其頃の時代の物を見ますと成程文字も章も皆立派な事です、私が昨年北區の大火で類燒しましたので、折角ためた全部を燒ました。

其中に先祖から有ました「天狗界播磨椽」と墨書ある
ました元祖義太夫樣の額が有ましたが、餘り大事
に直しすぎて、終によう取出さず、惜い事をいた
しました。夫から五代目は梶太夫より染太夫に改
め、後に越前の大椽、則現本雜誌に載て頂て居ます
實太夫事六代目染太夫の師匠其人です。此五代目
染太夫越前の大椽と云方は、晩酌を召しあがると
實太夫に馬になれ〳〵と命じ、實太夫心得て馬に
成りますと、直に脊中に股がり、尻に鞭を打、走
れ〳〵と座敷中を走らしたさふで、隨分面白い人
で、道の實太夫も此馬の役計りは閉口したさふで
す。又文字も能筆の方で、風雅な事をも好み、俳
句や狂歌を能なされたさふです。則實太夫の六代
目染太夫が、心がけのよき方なので此五代目の短
冊やら、古き書簡なぞ澤山に有ましたが、是も燒
ました。只此内の一二通が何かに紛れて出ました
ので、今は大切に直して有ます。機を見て或は本
誌に載て頂くかも知れません。爰に亦、實太夫の
六代目染太夫と云人は、至つて根氣の強い小細工
物抔を好み、又冥加のよい人で、御贔負先より貰
ひました、金封及び物品の目錄と先方の御名宛を
切抜き、淨るりの書本位の白紙の帖に、其切抜き
の金高記入の所と、先方の名宛、品物なれば其目
錄だけ張付て有ましたのが、數冊ござりました。
たいてい三年目位に一冊づゝの全部をちいさい切
抜の紙で張つて有ました。そして其帖の終りに何
百兩何百點と〆高が有ました。思ひまするとと上包
の全紙では、澤山の數にて保存に困り、又其儘反
古に仕用するは心苦しく、斯くして保存なし置、
時には其帖を見て、又後世まで冥加を感じられた
かと存じます。併し此帖もやつぱり大事にかけ過
ぎて土にかへしました。

傳記

六代目染太夫自傳

竹本叶太夫寄

(七)實太夫寒稽古の事

抑も竹本實太夫は師匠染太夫の供をして、東都に赴き、星霜早五ツ年に成けるが、思はざる出來事に師の勘氣を請し事、皆是其身の誤りなれば、此上はいつまでも此地に足を留め、時を得て師に勘氣を詫ん物と、胸を堅めて情け有る知るべの方へとたゞりける。爰に當地一つ橋樣の御用達を勤むる清水三左衛門といふ人あり。師匠染太夫を大のヒイキにて、淨瑠璃のお稽古にも師の宅へ來らるゝお方なり。殊更に實太夫にはいと深切の厚き人成れば、自身此清水方へ行き、高常の一條委しく物語をせし所、清水樣にも、高常と喧嘩の始末は疾に聞込み、勘當の事情まで御承知の事故、實は我等もいかゞに暮し居るやと心配の折とのこと、扨又此清水氏の朋友に荒木金治郎と云人あり。此人は師匠の内寶いね女を媒人せし方にて、御城内御綿御用達にて、先に云清水氏と同じ上るり御連中なり。扨清水氏云はれけるは、荒木も御身の事を明暮心配して居るゆゑ、萬事は荒木と相談の上にすべしとて清水氏は實太夫を同道して、荒木金治郎方へ行かれたり。荒木氏に面會一部始終咄しの上、荒木氏は實太夫を預り置き、折を見て歸參さすべしとの、深きお情けに嬉しさ限りなく、清水氏も大いに心落付て頓て自宅に歸らる。實太夫は其日より荒木氏の情にて、暫く此家に閑居とは成にけり。ある日の事、荒木氏は實太夫を呼びて何れ遠からず師匠の方へ歸らせる心積りなれど、何を云ふも藝道が未熟じは事あたはず、丁ど今の

身の上を幸ひ、藝道に他念なく晝夜とも心をはげみ、上達さへ致しなば、師の思はくも惡しからまじ、自然歸參も叶ふ道理と、樣々の御厚意有難く實最もと、夫より質太夫は、豫て我部家にあてられし小座敷に籠り、晝夜藝に心をゆだね、入用の本は旦那より與へらるゝ事なれば、金錢にとては事かゝす、暫時の間に百冊の段物悉く明かに成りにける。既に此時、早年の暮、乙月の寒空はいつに彌增し、日毎の雪や、風雨は云も更なり、殊更寒に入ていと冷渡り、手も足も氷の如く、爰ぞ豫て望みの時節と、當地外神田の御寺院ケ原は大廣場にて、大聲を遣ひ見る寒稽古には、最究竟の所なれば、夜半の頃より旦那の家を忍び出で、身には木綿大辨慶縞の大どてら、腹帶えつかり眼許り頭巾に顏を隱して高足駄、小田原灯燈手に提げて荒木の奥の庭先より、土藏の間を拔け出で、普請の足場を幸ひに、表の黑塀へさがりおり、漸〳〵の事に大道へ出る事、實に危險至極なり。雨の降る夜も降らぬ夜も、寒三十日の修行ぞと、心に定めし事なれば、盗人はおろか、狐狸に出合ふともいつかな痿まぬ大磐石、御寺院ケ原の眞中にて、一夜に三段づゝ語りけり。扨此御寺院ケ原の片側は家續きの裏丁成れば、家々に住居する諸人が、毎夜々々淨瑠璃語る聲を聞付けて、めい〳〵二階の手摺へ出て、今夜は何を語るかと、聞人は耳をすましけり。猶又此地に夜鷹そばとて、荷ひ歩くそばやあり。夜中商ひ仕舞にそばや仲間、此御寺院ケ原の片脇に、寄集る所なり。爰に又當地市中は犬大いに多く、此邊至つて澤山にをり、既に實太夫此御寺院ケ原へ始めて來りし其夜は、數多の犬に取圍まれて甚だ困れり。されども、命をも惜まぬ覺悟、何畜生めらと事ともせず、大廣場の眞中に足駄を並べ尻にかひ、啼哮る犬の聲もろともに、自身も聲を張上て語りければ、多くの犬も根

に負しか、終には泣止み引しりぞく、犬の心は知ねども、早犬どもら馴染に成しか、後には實太夫のそばに伏にける。されば修行の日數も早半月程に及びければ、聲は次第に弱り果、今は少しも聲出ず、され共むりな聲をつかひて、相變らず三段づゝやつばり語り居る程に、あたり近所の二階より聞居る人は氣の毒とや思ひけん、かちん餅を茶にうけて、實太夫に進めるもあり、砂糖湯を持來るもあり、或は白粥をたきて鍋の儘持來る人もあり、又夜鷹そばやは、毎夜爰にて淨るり聞を樂しみて、商ひを早うをまひ、いつもの如く寄集り、各〳〵かはる〴〵に夜鷹蕎麥を實太夫に振舞ひける、ある日の事二階の人々、蕎麥屋のめん〳〵寄集りて、實太夫に向ひ、全體御身は何所の何人なりやと尋ねられたれども、元來自身の恥、師匠の名の穢れと、始めより終りまで本名をも名乘らざりけり。斯て實太夫寒行のこと、荒木氏の耳にいりて

や、實太夫に云けるは、寒行に出ることは惡しとはいはねども、毎夜出入の雨戸の口を内より締る人もあらねば、もし盜人などに知れては不用心の至りなり。且は又此寒中に身にかゝる荒行して、もしもや病氣など引出しては何の効もなき事、最早寒行の日數も二十日餘りにもおよべば必ず其効空しかるまじ、今夜限りにて引取べしと恩人の諫め重きに依り、實太夫早速請引して、其夜御寺院ゲ原に赴き、鐘負の衆へ聲の出ぬを云立て病氣と云なし、今宵限のお名殘りと暇を陳れば、皆々は言を揃へ、扨も夫は殘念ながら、實は銘々打寄病氣など發りはせぬかと、案じ居たる折節ゆゑ、今宵限りとあれば、我々も大いに安堵せり、扨々いたはしの事ながら、今に假名も承はらね共、かゝる荒行の御心體、只の人にては有まじ、袖振り合ふも他生の縁、御出世を祈りまゐらすると、いとまめやかに陳らるゝ。實太夫は唯涙に暮れ、漸ふに

其座を立、いつもの席に押直り、座は構ふれど聲はでず、とやかくする内刻限延びて早寅の刻、今宵限りのことなれば、命限に語りげり。初段に二代鑑秋津島腹切の段、次に信仰記金閣寺、詰に忠臣藏九冊目の大場を語る。いかに我慢の實太夫も生死の思ひをして、語り終れば、東もそらみ、又もそれ〳〵一禮のべ心殘して程もなく、荒木の宅へぞ歸りげる。

（未完）

上村源之亟の事歴

淡路　引田源之丞

（一）

上村源之丞の事歴を書送る樣との御命じ、實に家の面目是に過ぎぬのである。之より淡路人形の沿革と、源之丞家の歴史に徴して、高覽を煩さんとするのであるが、由來記を述ぶるにさきだち、人形芝居の源之丞と云ふ事につき、讀者諸君に一應答へて置きたいのは名前であつて、姓は引田と稱へ。藝名は上村と云ひ、演藝界に對しては、上村源之丞と云ふ事になつて居る。處が安政年間に分家が出來た、人形一座を分與したのが上村源之重と名乘らしたのである。上村源之重では諸國へ出てもかばちが無いと云ふ處から、上村源之丞隱居座と云つてゐたが、また此隱居の二字もなんだか極りが惡いとかで、上村源之丞と名乘りだしたから本家は本家上村源之丞と稱へ來て、一方を隱居座と稱したが、遂に失敗して、三年前に一座家屋敷とも、本家の方に買取つて、今では無い事になつた。又茲に諸君も能く御承知の事と思はれるは、三十四年十二月四日朝日新聞紙上に道頓堀の辨天座で、淡路源之丞座と云ふのが乘り込んで、上村源之丞改名淡路源之丞と云ふて居たから、新聞を見るなり正誤の取消を申込んだ、新聞記者が賛美

同　千吉　同　吉田菊次郎　同　湯淺宇三郎　同　三好幸三郎
同　たか　同　時岡利七　同　高濱平兵衛　同　木下龜次郎
新町　扇光　同　佐々木清助　同　本多美奈當　同　阪本岩次郎
須磨　島田くに　同　木島又兵衛　同　新實八郎兵衛　同　近藤虎嘯
大阪　安達一甫　同　藤本ゆか　同　服部佐一郎　同　片木春人
同　吉見當百　同　古澤氏　同　加藤安兵衛　摂津　千原彌三郎
摂津　廣田山三郎　同　堀部氏　同　中西巴　同　濱名傳平
京都　贄田武　同　小辻喜三郎　同　森下貴鶴　同　小寺喜代藏
同　平野竹次郎　同　梅村屋　同　藤田卜三　伊丹　村岡酒造店
同　河田氏　同　ちもと　同　伊藤駒吉　同　竹本房吉
同　伴榮吉　同　人見勘助　同　竹澤宗六　（以下次號）
同　伊藤氏　同　小島喜代松　同　福山千鶴
同　山村彌一郎　同　一宮藤次郎　同　宅間濱戸

傳記

六代目染太夫自傳

竹本叶太夫寄

（八）實太夫勘氣赦免の事

赤阪の師匠は、先師（四代目石屋橋染太夫と云ふ）の七回忌に當り近日佛事の營に付、親類幷に懇意の人々へ廻文を以て案内を致す、親戚のほか正客の方へは荒木氏

清水氏を始め、福田猪之助、鹽瀬新二郎、小池孫市、若松吉兵衛、釜屋傳兵衛の諸氏、其他軒數それ〳〵あり。斯て荒木氏は此の佛事につき、爰ぞ實太夫の勘氣赦免の時至れりと、直樣清水氏へ談合し、扨いよ〳〵佛事の當日に相成れば、荒木氏は清水氏と同道して實太夫召連れ、赤阪の田穗庵へ趣き、實太夫を蔭の間にひかへさせ、夫婦へ挨拶事終りて、二人とも口を揃へ、けふの佛事を幸ひ、何卒實太夫の勘氣赦しくれよとの平押に、田穗家は恩儀有る人の言といひ、且内實いね女仲人の事あり、日柄といひ旁以て違變もならず、兎角も承知致せしかば、早速實太夫を呼出し染太夫夫妻に對面させ、勘氣赦免の上何事も是迄通りと相成りたり。荒木氏は師匠に重ねて云はるゝやう實太夫も是より形をかへ、至急手挾き家を持せ度と賴まるれば、師匠も大に悅び一禮を述べらるゝ程なく佛事の時刻もうつり、荒木清水實太夫も其座に連り供養もすみて、一同も座をひらき、元の神田へ歸りける。

(九) 實太夫傳馬町新宅出來の事

荒木氏は和談調ひし事家内へ咄されしに、御新造始め子息格太郎氏も悅び、此上は取敢ず實太夫に一家を持せんとて詮議中、茲に稻荷平兵衛と云顏役の仕事司あり。此平兵衛の母親は稻荷のお婆さんと云ふ大女にて、年六十の大通り者なり。此人元來實太夫を大の贔負なれば荒木氏の賴にて、實太夫の親分に成り呉れ、此家の戸籍に加はりて、傳馬町の裏店へ別宅する事になり、裏家ながらも造作雜費に參拾金も入用をかけ、迫々普請出來ける。扨此稻荷の宅と、實太夫の新宅とは、道程漸く二丁ばかり、荒木氏の宅からは凡半道も隔たれば、手近くの稻荷より諸事を請込み入用の金子を

も取替て日々世話をなしけるが、造作終りて、荒木旦那を始め皆々新宅に打寄、文政十三寅年壬三月二十三日茲に目出度家轉祝儀納まりける。

獨り住の新世帶の中へ、大阪鶴澤文造の門人萬吉といふ者、男一人連立て來り押附の居候、實太夫も詮方なく萬吉の世話をして、今一人の男は弟子となし、藝名を竹本園太夫と名附、其日より飯焚の役割なり、萬吉は上方者なれば天晴の藝道ゆゑ我等が三味を引す事に定め、日毎に藝道鬪み居たりける。其内に赤阪の師匠染太夫も寄場淨瑠璃興行開場しければ、實太夫も元の如く師匠の中語をなし、諸方の寄席へ一座にて出勤する事、是も偏に師匠の惠み、且は又、荒木氏の厚恩ぞと、心魂にゑみわたり、此上は猶も師匠に盡さんと一心に、仁義を守り、師匠に孝を盡せしかば、其頃人毎に云を聞くに、後年に至り必ず師匠の名跡を相續し、日本三都に名を得んと云れたり、嬉しさ限りなき中に、人は何を云やらと耳にもとめず居たりけり。

松葉籠

巢林子墳墓考證

小野利教

(二) 日昌上人と正本屋

九右衛門

廣濟寺はもと天台の巨刹で、中ごろ禪刹となり、日昌上人に及んで法華宗となつたのである。實に日昌は中興の開山であつて、學德圓滿衆庶の歸依を得たもので、其所生は大阪寺島松島の船問屋尼崎屋吉右衛門である。尼崎屋は最初銅座に居て後に寺島に移つたのだといふ、この尼崎屋の閑居、卽ち隱居所が大文豪巢林子の住んで居た所であつて、

傳記

六代目染太夫自傳

竹本叶太夫寄

(十)染太夫一子源治郎死去の事 并實太夫萬吉心願斷食の事

世の中に恐るべきは鬼門金神の祟りとか、師匠染太夫は、先年本命的殺の方を知らずして、此東都に來りしが、其身に祟りはあらずして、藝運強きに依り、當地にても其名四方に知れたれども、爭ひ難きは當地に着の丈後は、一年に一度づゝは、聊かながらも障り事あり、師匠も是を心にかけて神佛を信ずる事世の人に勝れたれば、染太夫は御幣かつぎやと人毎に云なしける。さる程の信心者なれ共、其身の約束は是非もなし、大阪にて設けし松之助は四歳にして死去し、又當地にて今の妻女に出生せし三歳の源治郎は此度輕からぬ疱瘡に惱み、師匠夫婦は只一人子の事故介抱如才なけれ共、疫病日に彌增し、とても治る樣子あらざれば、祖父母妻女のかなしみ大方ならず、道の師匠も勢力を落し、家内は晝夜啼あかすのみ。實太夫は師匠夫婦の嘆きを見かね、何卒子息の命を取とめ度、當丸の内虎の御門の金毘羅樣へ命乞の心願をかけ一心に念じけるにぞ、鶴澤萬吉も其心にて堀の内の大師樣へ斷食をして、命乞の願をかけゝり。扨此堀の内と云は師匠の宅より道のり三里ばかり、萬吉至つてやさ男にて、心もまた優しき正直者なり、かゝる人物が一心をこめたれば佛神も感應ましますならんと、皆々猶も力を添へけれども、源治郎は養生叶はず天保二年二月二十日の夜終に冥途の人となれり。萬吉いまだ之をゑらずして、堀の内なる宿屋に泊り、晝夜わかたず水垢離

を取り、只一心に源治郎の命乞を祈りける。されば實太夫は一刻も早くこの事萬吉に知せて、葬式にも立合せんと身拵へして堀の内へぞ走り行く。折からあきりに雨降出し、道の惡しき事たとへん方なく、漸う到り着けば、哀れや萬吉は、早三日間の斷食に痩衰て髪振みだれ、顔も青ざめ幽靈にも等しき姿、獨りとぼ〳〵御千度を廻り居る所なれば、實太夫聲をかけ、此中よりの心勞いかにも勞敗、一先萬吉を連歸れと師匠の頼み故わざわざ迎ひに來りしなり、兎も角宿屋迄歸らるべしと何氣なく云ければ萬吉わつと泣出し、大地にひれ伏腰も扳け、暫しは啼音も止ざりけり、やゝあつて顔を上云けるは、兄貴の僞りは始めに夫と早知たり、扨は命乞の願は叶はずして、源治郎は死たるかや、是全く我等が信心の屆かざるゆゑなれば猶更爰は去がたし、とさめ〳〵と泣くづをれて其座を立ず、ぜん方なくて宿屋へ歸り白粥を焚せ置き、四つ手駕を雇ひ、萬吉を無理に乘せて連歸り彼白粥を食せ宿の仕拂をして、駕を早めて大雨の中、小松町の師匠の宅へかけ戻り、師匠夫婦に對面すれば、夫婦も萬吉の心底過分さに一禮をのべられ、一同愁にとづみける。葬式いかゞと尋ぬれば、野送りは遠方の墓所故、とくに送り出し、最早其寺へ着時刻と聞て今更跡を追ふとも追付事ならず、扨も〳〵かへす〳〵殘念と、實太夫は氣拔の如く、又萬吉は勞れの上に駕にゆられし事故に殊更正體なかりけり。程なく野送りの人々は寺より歸り、いづれも二人の心底推量してそこ〳〵に諫め立歸る。七日々々のぶひ吊ひ、忌明もすめば世にまぎれ、次第に愁も薄らぎて、月も立、年も立、早翌年の如月も打過て、桃の月の春めきて、卯月、五月雨、水無月は、人も浮立兩國の涼みの頃も過行て、文月、葉月、菊の月、秋は殊更風流の菊の花壇は紅葉の、ざゝんざ諷ふ世の樂、無常

の跡は悦びと、爰に師匠の内寶いね女は、いつぞやより懐胎し早臨月に成にけり。

上村源之丞の事歴

淡路　引田源之丞

（二）

我が上村源之丞の人形座は現今では左の五組に別れてゐる。

大黒組　主任　引田喜三、
　太夫豐竹新呂太夫
戎　組　主任　津田慶次郎
　太夫豐竹槇太夫
辨天組　主任　引田仙吉
　太夫豐竹浪太夫
福六組　主任　吉岡義雄
　太夫豐竹呂關太夫
多聞組　主任　隅田茂平
　太夫竹本錦太夫

右各座の組織は同一にして、主任、頭取、太夫、三味曳、人形遣共一行都て三十五六名、荷物は成るたけ手輕くして、百五十石の船一艘で積める、汽車なれば、貨車二輛である、昔は實にたまげるほど荷物を持たものである。大八車を何十輛ともなく使つたものである、船なれば三百石積でなければならぬ、駄馬も多く使つたのである、費用の多く掛るには目をかけず、たゞ荷物の多いのが人氣を取つたのである、又源之丞の人形は頭が大きいと云ふ評判を取つたので段々頭を大きくして夫につれて衣裳も大きくした、大體の人形は鳥渡小柄の人間程あるが、此二十年以來遂に扱ふに困るほどの大人形となつた、近來時勢の風潮に伴はれ荷物の多いは馬鹿々々しいといふ事に氣がついて荷物を手輕くするについて人形までも加減して作